

当院における若年がん患者に対する妊孕性温存療法の現状

1. 門上大祐 北山利江 阿部恭子 北野裕子 高矢千夏 中岡義晴

2. 森本義晴

1. 医療法人三慧会 IVF なんばクリニック

2. 医療法人三慧会 HORAC グランフロント大阪クリニック

【目的】集学的治療の進歩に伴いがん患者の生存率が改善した一方で、治療に伴う妊孕性消失が女性としての QOL 低下の大きな一因となっている。当院でも若年がん患者の妊孕性温存に取り組んでおり、その現状について報告する。

【方法】2013 年 4 月～2017 年 5 月の期間で、妊孕性温存目的に原疾患主治医から紹介となった担がん患者 97 名を対象とした。全ての患者に原疾患治療最優先を基とした妊孕性温存治療についてカウンセリングを行い、同意が得られた症例に対して治療を開始した。これらの症例について後方視的に検討した。

【結果】症例は乳がん 65 例、造血器腫瘍 24 例、その他 8 例であり、平均年齢は 34.3 歳 (17～48 歳) であった。初診時、既に化学療法後であった 14 症例のうち、7 例が CRA (Chemotherapy-Related Amenorrhea) の状態であり治療を断念した。治療に進んだのは 71 症例であり、症例あたりの平均採卵回数は 1.37 回であった。卵巣刺激は乳がん症例には **letrozole を併用した mild stimulation** にて行い、その他の症例では年齢や AMH、AFC 等を考慮して **クロミフェン併用 mild stimulation**、Long 法、Antagonist 法を各々選択した。刺激期間は平均 7.15 日 (1～10 日) であり、症例あたりの平均凍結卵子数は 5.7 個 (0-20 個)、平均凍結胚数は 3.0 個 (0-12 個) であった。平均 PeakE₂ は 445.56 pg/ml であり、特に乳がん症例では 198.36 pg/ml であった。胚移植は 6 名に対し合計 9 回行った。1 名で妊娠を認めたが、妊娠 9 週で流産の診断に至っている。

【結論】治療を開始した全症例で、原疾患治療を遅延することなく、生殖補助療法を行うことが可能であった。一方で妊娠を希望されたが CRA のため困難であった症例も存在し、妊孕性温存の必要性について、より一層他科や他院との連携や社会への周知が必要であると思われた。